資料4

東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設
基本構想検討会議
第1回

20160627

福島県企画調整部文化スポーツ局
生涯学習課

（有識者会議におけるとりまとめをもとに整理）

世界初の甚大な複合災害を経験した福島

地震・津波災害 ＋ 原子力災害

この災害からの復興拠点として、人々が集うシンボルとなる場

【基本理念】

- 世界初の複合災害と復興の記録や教訓の **未来への継承 世界との共有**
- 福島にしかない複合災害の経験や教訓を活かす **防災・減災**
- 福島に心を寄せる人々や団体と連携し、地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による、**復興の加速化への寄与**

【施設の機能とエリア】

展示・交流エリア

広島や長崎のように、国内外から観光客や修学旅行・教育旅行・企業研修生が訪れる場であって、被災者を始めとする復興に向かう県民が、県内の様々な取組の現状を知り復興への思いを強くする、アーカイブの中核的な場

機能１：正確でリアルタイムな情報発信
世界へ向けた情報発信・総合的なアーカイブサイトの構築・廃炉進捗情報　など

機能２：訪れる多くの人々に効果的に伝える展示
事実に基づいた内容・象徴的な実物展示による記憶の継承・更新しやすいシステム　など

機能３：後世に正しく伝える教育
災害の実態や教訓、福島の歴史文化を多世代へ継承・教育旅行の受入れ、年代や立場に応じた様々な学びの場　など

機能４：地域コミュニティの再生に資する様々な交流
活動の場の提供・語り部等の活動による世代間交流・地域や国を超えた連携活動　など

機能５：復興を担う人材育成
コーディネーター育成・ボランティアスタッフの組織化・地域文化、伝統芸能を担う人材育成・防災、減災関係者の専門研修　など

資料エリア

世界初の甚大な複合災害による史上類を見ない遺構や遺物、文書・映像等の保存は急務。逸失、散逸防止に寄与するのみならず、これから数十年にわたる福島の原子力災害を克服する姿を記録・保管し続ける、展示・交流、研究の心臓部としての役割を果たす場。

機能６：災害の記録や資料の収集・保存

研究エリア

様々な研究者、福島でチャレンジするための調査を行う方々、知識をさらに深めようとするリピーター等が、収蔵されている福島にしかない収集資料に魅力を感じて、集い・更なる調査・研究を深め、研究会やシンポジウム等を通じた発信により災害研究や政策立案、教育等人材育成に寄与する、全体の頭脳としての役割を果たす場。

機能７：複合災害の実態と教訓の継承・共有のための調査研究

1. 資料エリア

全県の震災記録・教訓の集約

時間の経過とともに情報や資料の保存は急務。
これらの散逸を防ぎ、これからの福島の姿を記録・保管するためにも重要なエリア。
地震、津波、そして原子力災害という世界初の複合災害の記録、そしてそこから復旧・復興をとげるふくしまの姿を、保存とともに後世に伝える役割を担う。

資料閲覧・貸与

3. 研究・管理エリア

研究施設等との綿密な連携

災害研究や政策立案、教育等人材育成に寄与する、全体の頭脳としての役割を果たすエリア。

①調査・研究・人材育成
　収蔵されている資料に魅力を感じて、集い・更なる調査・研究を深める。
　語り部の養成、防災士や災害ボランティア等の人材育成活動の支援を行う。

調査・研究

人材育成

②研究発表
　研究成果の発表や国際フォーラム等も開催し、情報を発信する。
　震災関連映像の上映を行う。

成果の発信・拡散

【管理運営を見据えた施設整備の留意点】

世界への発信

人類がこれまで経験したことのない未曾有の複合災害の実態と教訓を継承・共有していくため、多言語化など国際的なサービスを提供出来る施設とする。

汎用性のある施設

様々なアイデアが生まれ、理解の深まりや新たなチャレンジにつながるよう、固定化する空間は必要最小限とし、フレキシブルで汎用性のある施設とする。

継続した集客・交流の実現

復興進展や地域の産業、文化など福島の現状と魅力に直接触れてもらう。復興記念公園とアーカイブ拠点との関係・連携の強化や、地元市町村との綿密な連携により復興記念公園・地元自治体を含めた誘引・回遊を促す。

2. 展示・交流エリア

「ふくしま」だからこそ伝えられる話題性・求心性

現物によるリアルな展示と、実体験の記録を中心に、ここにしかない世界初の複合災害の記録を伝える。
また、被災者をはじめ県内の人々や来場者が、復興への過程、最新の取組、これからの姿を感じ、復興への想いを強くするアーカイブの中核的なエリア。

■導入

・プロジェクションマッピング等の映像手法を用いた汎用性のある導入映像。
・ソフトの更新性に配慮し、常に新しい情報提供を行う。

【イメージ】導入映像

■福島第一原発事故と原子力災害　～事故のこと、廃炉のいま～

原発事故のこと

・事故/避難指示等の公文書/写真や新聞記事/対策の現場/除染/廃炉作業

水素爆発の映像

災害対策本部設置の経緯等

事故後の様子

廃炉のいま

■地震・津波災害　～現物から伝える～

現物が語る複合災害の爪跡

・被災現場/災害ボランティアの記録

震災の時刻に止まった時計

津波被災パトカー

折れ曲がった車輌
新地駅から乗客を警官が誘導して津波被災を免れた

津波で破壊された町と津波の到達位置

■暮らし

さまざまな影響と県民、対策

・避難生活の変遷/日常の変化

住民避難の様子

避難指示の経緯

避難所

仮設住宅

帰還後の生活

帰還困難

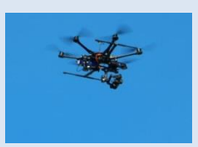
農地の除染

屋内遊び場

■復興へ

ふくしまの「これから」を体験・実感

・12市町村将来像/イノベーションコースト構想/企業の挑戦/再生エネルギー



ドローンなどロボットの未来

再生エネルギー

【イメージ】イノベーションコーストギャラリー

■語り継ぐ

県民一人ひとりの“記憶”の記録・継承

・オーラルヒストリーを中心とした経験の伝承/伝統の継承

困難を乗り越えて

伝統文化・お祭りの継承

■復興活動の拠点と情報発信

・地域住民が集いやすい場づくり/地域や個人での活動の連携/語り部実演/線量、廃炉進捗、事業再開、学校生活などの「今」をリアルタイムで発信

リアルタイムな発信と復興に向けた活動・交流の拠点

あの日の記憶を伝える

【イメージ】ふるさと創造広場

新価値創造へのチャレンジ

風評払拭の取組の状況

多様な人材との交流

空間線量率のいま

農産物のいま

県民の想い･意識
帰還困難区域の人たち
県外避難の人たち
風評の払拭・
克服
さまざまな怒り・
やるせなさ・
不安
復旧・復興回復・
創造への決意
県民保有の資料
（映像・写真・メモ）
※県・各自治体が収集中
追悼・鎮魂
各種報道（ＴＶ・新聞）
除染とこれからの
まちづくり
（帰還）
子どもたちの将来
防災教育
あの時経験したこと
いま経験していること
地震・津波への
基礎知識
未来へのメッセージ
地震・津波など
防災への意識づくり
2011年3月11日
世界初
甚大な複合災害
原子力
環境回復
経過時間
地震
津波
環境回復・放射線・
環境創造に関する学会や国際会議
再生可能エネルギーへの転換
避難者数・線量・健康・
避難区域・廃炉工程
観光客数　等
災害から現在までの出来事
（事故・苦しみ・復興）
環境回復に関する
研究・県内企業の
技術開発
第一原発事故の概要
災害の事実
再生可能エネ・水環境・大気
野生生物（レッドデータ）　等
復旧とまちづくり
健康被害
食・水の安全
廃炉・除染技術の発信
事故の検証
事実･知識

類似施設の特徴

■雲仙岳災害記念館

【目的】
・自然災害の脅威と復興への住民の取り組みを後世に伝え、・火山と人との共生、生命体としての地球を象徴する火山をテーマに、雲仙岳に焦点を当てている。

【特徴】
・雲仙岳の噴火によってできた埋立地に建設
・自然との共生、全国からの励ましに対する感謝、被災者への鎮魂を表す自然豊かな施設
・起伏のあるランドスケープの中で、館内をめぐる見学者動線の中に雲仙岳とのつながりを積極的に作ることにより、周辺に点在する被災地をネットワークし、火山と人の関わりを体感してもらう環境をつくっている。
・大空間の展示ゾーンと、メディアライブラリー・交流スペース・事務室などから成る学習ゾーンに二分されている。
・それぞれのゾーンには島原を象徴する水の庭と溶岩の庭がそれぞれ楕円形に穿たれる。

大地のエネルギーをうねりとして表現している力強い曲線の外観

普賢岳の噴火による火山灰や溶岩を路盤、盛土として活用。芝生の中の散策道「溶岩の道」の両脇の礫と自然の丘に点在する岩石（土石流で流下した岩石）で施設の景観特徴を表現。

全国から寄せられた義援金への感謝、被災された方への鎮魂、復興への希望を表す溶岩と水を配置したモニュメント
COSMIC VOLUME（宇宙の力）

エントランスホールと学習ゾーンは自然光があふれる一体的な空間

■人と防災みらいセンター

【目的】
・阪神・淡路大震災の経験と教訓を後世に継承し、国内外の災害による被害の軽減に貢献するとともに、いのちの尊さや共生の大切さなどを発信する

【特徴】
・「防災未来館」と「人未来館」の2館で構成。
・「防災未来館」は、震災のモニュメント性やシンボル性を持たせるため、震災の記憶を風化させない強い意志を『シンプルな立方体』で、時間の経過により成長拡大するイメージを『ガラスの結晶体』で、中の活動を見せる透明感を『ガラスの被膜』で表現している。
・「人未来館」はいのちの尊厳と生きる喜びを高めるため総合的なアプローチを行う“ヒューマンケア”の理念を発信するイメージとして、無垢のいのちを『乳白のガラスのキューブ』で象徴し、『丸い大きな壁面に縦リブ』で、大きく包むやさしさを表している。

「防災未来館」と「人未来館」の2館で構成。

シンボル性を高め、『1・17を忘れない』と世界に発信することを目的とし、毎月テーマを決めて建物をライトアップしている。

震災の発生時刻や震度などが、モニュメント化されている

曲がった高速道路支柱の一部を切り取った屋外展示

建築機能の特徴例

■開放感、透明感

【金沢21世紀美術館】
公園のような、開放感あふれる空間。
ガラス張りの平屋の建物は中は明るく、気持ちの良い空間。

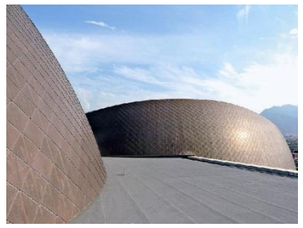
【今治市岩田健母と子のミュージアム】
外観は、表情を感じさせない閉鎖的な意匠
対照的に、内部は白く暖かい内部空間をもち、建物内から直接内庭へつながる。

■ランドスケープとの一体感

【長岡リリックホール】
広々とした芝生に屋根がゆるやかなカーブを描き、一体の形状が生まれている。
内部は光の取り入れ方が工夫され、オープンな空間。
ホワイエは林立する幾本もの柱と曲線のベンチで構成され、光と影が四季折々の表情を織りなしている。

【那須歴史探訪館】
ガラスの透明な壁面を用い、外部のランドスケープと一体化された透明なミュージアム

■地元産の素材を使う



【あかがねミュージアム】
新居浜市発展の礎となった「銅」の板をふんだんに使用。
「あかがね＝銅」の板を流線型の外壁に、愛媛県の大洲地方でとれる「大洲の青石」を外構や外壁に使用。
吹き抜けのホールも特徴的。

【アオーレ長岡】
中心部は屋根付きのナカドマと呼ばれる中庭を配置。
地元の素材（越後杉、雪さらしの和紙、栃尾ツムギ）を多用。やさしさと暖かさを与え、地域交流のシンボルに。